

22

華岡青洲の医哲学に及ぼした吉益東洞の影響

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

紀伊藩の儒者仁井田好古の撰になる「華岡青洲墓誌銘」(1835)に「遂唱内外合一活物窮理説」とあることから、華岡青洲が提唱した標語は「内外合一活物窮理」の8文字であると180年以上信じられてきた。しかし、前半の4文字「内外合一」は仁井田の言葉であり、後半の4文字「活物窮理」のみが青洲の言葉であることを演者が明らかにしたので、「内外合一活物窮理」によって青洲の医哲学を説明してきた従来の解釈を訂正せざるを得なくなった。青洲自身が書などに記した、彼の医哲学を示す重要な語「医」、「活物窮理」、「方」、「術」、「得与不得」、「死生」を取り上げて、改めてその思想の淵源を探った。

呉秀三は「華岡青洲先生及其外科」の冒頭に、青洲の書「医惟在活物窮理」を掲げている。この「医」は「医学」と「医療」を包含する広義の「医」である。「医」の目的は「活物窮理」に尽きるという青洲の思想を表した言葉である。青洲にとっては「医」＝「活物窮理」であったことは、青洲が京都での遊学を終えて帰郷する際、朝倉荊山が青洲に贈った「送序」に、青洲の言葉として「苟も、既に医為るや、疾を治す道に神を焦がし、能を極めざる可からず。我、人の治す能わざる所の者を治するを願う。」(原漢文)とあることによって容易に首肯される。青洲にとって最も重要なことは「疾を治す」ことであり、青洲の「医」＝「疾を治す」＝「活物窮理」であった。吉益東洞もまた「医」の目的は「疾を治す」ことにあると述べ、このことを「夫れ、医の道たるや疾を治すのみ」(原漢文)と表現した。「医之為道」は「医」であり、「活物窮理」は「治疾」でもあるから、青洲の「医惟在活物窮理」は東洞の「夫れ、医の道たるや疾を治すのみ」と同じ主旨である。

青洲の別の書に「欲療疾病當精其内外、方無古今唯在致其知」がある。「疾病」を「療」するためには、「内外」に精しくなければならぬし、伝統的な処方だけに拘ってでは効果を挙げることができず、新しい処方をも採用して十分にそれらの持ち味を発揮させなければならぬとした。この「方無古今」の句も東洞の主張する所であった。東洞の言葉に「方に古今無く、能く治すを以て方と為す。」(原漢文)とある。伝統的な処方のみが「方」でないとする点では、両者の考えが一致している。

青洲は「医」において「術」を重視し、「術」は言葉や文字によって容易に教授できるものではなくして、その「術」を会得しようとする者の強い意思と積極性が重要であるとした。修業を終えた門人に与えた免状に「得与不得在其人」(得と不得は其の人に在り)とある。「(自分は一生懸命に教えたが)それを会得したか否かは、君自身の問題である。」というのである。大変厳しい言葉であるが、これも東洞の言葉を援用したもので、東洞は「其の方尽く伝われば、其の得と不得は其の人に在り。」(原漢文)と述べている。東洞は内科医であるから「方」について述べ、一方、青洲は外科医であるから「術」について述べているが、意味する所は全く同じである。青洲は自ら著述を著さなかったが、その「術」を言葉で表現することも、文字で書き表すことも出来ないからであった。例え著したとしても、完成した「著書」は「糟粕」に過ぎないとした。同じ考えを東洞も有しており、「夫れ、医道は獲ること難きものなり。言語を以て論ずべからず。黙して之を知るのみ。」(原漢文)とある。「死生」についても青洲は東洞の考えを受け容れている。

以上述べたように、青洲の医哲学の根本の殆どを吉益東洞の主張の中に見出すことができ、青洲が東洞から大きな影響を受けたことが窺われる。